

アン・セクストンにおける詩的子宫 他者の声を産み出す臓器

小野 佳奈子

序論

本稿は、20世紀アメリカの告白詩人として知られるアン・セクストン（Anne Sexton, 1928–1974）の複数作品を対象に、「詩的子宫」というモチーフの機能を考察するものである。セクストンの詩における詩的子宫は、語られなかった声や言葉を生成する土壌として機能し、ジェンダーに回収されない詩的可能性を条件づけるモチーフとして読むことができる。本稿では、批評史においてしばしば詩人自身の声へと回収されてきたセクストンの詩の声を、詩的子宫のモチーフを中心に再検討し、その正当化が孕む限界を明らかにすることで、ジェンダーを横断し得るセクストンの詩世界の一側面を提示する。

第1節 “Sylvia’s Death”における“Sylvia”の語られなかった声の再生

Live or Die (1966) 所収の “Sylvia’s Death” は、シルヴィア・プラスへのエレジーとして知られ、セクストン自身がプラスの死を自己の自殺願望と重ね合わせていたことでも知られている (Middlebrook 200)。詩中では、語り手がプラス（以下シルヴィア）の生前を回想し、ボストンのパブで死や自殺について語り合った場面が描かれる。ここで反復される *talked* は、単なる発声の強調ではなく、反復によって意味を空洞化させ、言葉としての機能不全を露呈させる。

the one we talked of so often each time
we downed three extra martinis in Boston,
[...]
the death we drank to,
the motives and the quiet deed? (*Complete Poems* 126 下線は引用者、以下同様)

語りの焦点は次第に飲酒行為へと移行し、*downed* や *drank* といった動詞が、*dying* や *death* と音韻的に共鳴することで、死のダイナミズムが身体内部へと取り込まれていく過程が示唆される。この過程で、語り手は死を口から吐き出すことに失敗し、それを「内包」する方向へと向かう。その結果、詩中には丸括弧で囲まれた *our boy* という詩的客体が現れ、視覚的にも妊娠した腹部を想起させる構造が形成される。

(In Boston
the dying
ride in cabs,
yes death again,
that ride home
with our boy.) (*Complete Poems* 126–27)

この括弧は、排出の失敗を隠蔽しつつ誇張する詩的子宫として機能している。*our boy* は、セクストンとプラスが共有していた病や自殺願望の象徴 (*No Evil Star* 11) であると同時に、失われた「自殺」という欲望の対象を示す。ここでは、Judith Butlerが *Gender Trouble* (1990) にて展開した、フロイトのメランコリア論の拡張理論を援用することで、語り手が喪失対象を自我内部に取り込み、結果として男性性（ファルス）を内在化していく過程を読むことができる (83–84 Butler)。語り手はこの男性性を隠蔽するために「女性性」というマスクを装い、Butlerのいうマスカレードを詩的に実践している (61–65, 70)。後半では、語り手がシルヴィアの仮面を被り、プラスの台所での自殺をパロディとして再演する場面へと移行する。ここで詩のタイトル “Sylvia’s Death” 自体がパロディ的に機能し、死者の声を召喚するパフォーマンス装置となる。しかし同時に、*our boy* が括弧 (= 子宮) の内側から決して外に出ない点は、「自殺」を言語化して嘆くことの不可能性を強く示唆している。Butlerによれば、メランコリアは悲哀の言葉が欠如した状態であり、その喪失は隠喩的な置換によってのみ処理される (92)。本詩においてセクストンは、この「悲哀の不在」を処理する手段としてパロディを用い、沈黙や言語化の失敗を、新たな発声形態へと変換している。こうして “Sylvia’s Death” は、死と沈黙をめぐる言語の不可能性を抱え込みつつ、それ自体を詩的創造の条件へと転化する作品として位置づけられる。

第2節 “In Celebration of My Uterus”における男性詩人像における創造力の欠如の露呈

Love Poems (1969) 所収の “In Celebration of My Uterus” (以下 “Celebration”) においては、詩的子宫が発声以前の沈黙を条件づける場として機能し、ジェンダーと声を攪乱する可能性が提示されている。本詩では、女性の「沈

黙」や「語れなさ」が、多様な他者による共感的・模倣的反復を通じて原義的な意味を破綻させ、逸脱的な発声と創造へと転化されていく。詩中では、過剰なほど多様な女性たちが、それぞれ異なる行為を通じて「沈黙」や「語れなさ」を模倣する。その反復は次第に破綻をきたし、他者の「嘆き (mourning)」の言葉を生成する契機となる。

Many women are singing together of this:
one is in a shoe factory cursing the machine,
one is at the aquarium tending a seal,
one is dull at the wheel of her Ford,
one is at the toll gate collecting, [...] (*Complete Poems* 181–82)

ここで反復される One is ... は、不定冠詞と過剰な列挙によって主体を特定不能にし、ジェンダーの境界を曖昧化する。同時に、この模倣は「共感」の形式であり、共感の対象は言葉そのものではなく、「言葉を失った状態」である。このスタンザに漂う音楽性も重要である。all/seem to be singing, although some can not/sing a note において、音韻とリズムは意味に反して「歌い出す」力を帯び、沈黙の模倣が発声へと逸脱する過程を可聴化する。こうして詩的子宮は、沈黙を孕みつつ、それを言語生成へと転じさせる場として立ち現れる。一方で、本作に描かれる多様な女性像は、ケアや他者配慮に従事する「典型的な女性像」をも想起させ、Carol Gilligan が著作 *In a Different Voice* (1982) で提示したケアの倫理と接続されうる (168, 173)。しかし本詩は、共感的関係を発達完成へと収束させるのではなく、模倣と反復を通じて生成を半永久的に開いたままに保ち、逸脱の可能性を内包している。後半のスタンザでは、(if that is my part) という括弧付きのリフレインが反復され、子宮や父権制的女性像を皮肉化する。

let me carry bowls for the offering
(if that is my part).
Let me study the cardiovascular tissue,
let me examine the angular distance of meteors,
let me suck on the stems of flowers
(if that is my part). (*Complete Poems* 183)

同時に、医師や分析者といった男性的身体性が立ち現れ、語ろうとしながらも語れない「男性の語り手」の像が浮上する。この括弧は、子宮の内壁を想起させる視覚的装置であると同時に、「産まれ得ない言葉」を囲い込み、排出不可能な状態を示している。結果として“Celebration”は、周縁化されてきた女性の「沈黙」を過剰に反復しつつ、それをパロディ的に変形することで、語ることのできない男性詩人像をも逸脱的に生成する。この過程において詩的子宮は、沈黙を誇張するパロディ装置であると同時に、言葉が産まれる以前の条件を孕む生成の器官として再定義される。ここで描かれる沈黙は、抑圧の徴ではなく、新たな発声を誘発する場として機能している。

結論

本稿は、アン・セクストンの詩における詩的子宮というモチーフを通じて、声・沈黙・ジェンダーの関係を再検討した。告白詩の枠組みにおいて詩の声が詩人自身へと回収されてきた従来の読解に対し、本稿は、声が生成される以前の条件に注目することで、その限界を明らかにした。分析の結果、詩的子宮は単なる女性的身体の隠喩ではなく、沈黙や失敗、喪失を孕みつつ言葉を生成する詩的装置として機能しており、詩の声を詩人自身から切り離す可能性を内包していることが示された。この概念は、セクストン研究にとどまらず、告白詩や抒情詩における声の成立条件を再考する視座を提供するものである。

引用文献

Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge, 1990.

Gilligan, Carol. *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Harvard UP, 1982.

Middlebrook, Diane Wood. *Anne Sexton: A Biography*, Vintage Books, 1992.

Sexton, Anne. "The Bar Fly Ought to Sing." *No Evil Star: Selected Essays, Interviews, and Prose*. Edited by Steven E. Colburn. The U of Michigan P, 1985, pp. 6–13.

———. *The Complete Poems*. Mariner Books, 1999.